

## 「高齢者と家族への看護」 — 受講前後の比較 —

谷田恵美子 林みつる 小林愛 屋敷久美\*

"Nursing to the Elderly Person and the Family"  
— Before and After the Lecture —

Emiko TANITA, Mitsuru HAYASHI, Ai KOBAYASHI, Hisami YACHIKI \*

### 要 旨

看護をするには、対象の本人だけでなく家族、それを取り巻く地域も視野に入れて考える必要がある。今まで家族看護については多数の教科で教えていたが、2006年度「家族看護（2年次）」として開講した。学習効果（家族機能中心に）を探るため、「高齢者と家族への看護」に関連する調査を受講前後にした。受講生43人（回収率95.6%）は全員に両親がおり、高齢者との同居経験のあるものが約半数であった。

1. 受講後は約8割が、プラスイメージに変化している。家族と言うよりは個々の家族員を大切にしたいという思いが強くなった。
2. 家族に期待する機能では受講前後ともに情緒面が大きい。受講前後では介護機能のみに有意差がみられ、介護の外部化が影響していると考えられる。
3. 受講後の家族機能の項目間の影響力（パス図）から、「日常生活のサイクル」と「養護・文化的なサイクル」に分けられた。
4. 受講前後で、家族機能の影響力を比較すると養護機能と対外的な交流機能、文化の継承機能と家事機能、介護機能と情緒面の安定に大きな差があった。低下した家族機能の影響力を比較すると、家事と生活基盤機能、対外的な交流機能と文化の継承機能、介護機能と養護機能、情緒面の安定と生活基盤に大きな変化があった。受講することで、家族機能項目間での影響力の大きく影響を与えていた。「高齢者と家族への看護」を受講したことで家族機能の項目間では大きな変化があり、項目間の関連に関して学習効果があった。しかし、一連の授業を振り返ると、家族が変化（対処能力、成長、縮小）していく経過には目がいていない。今後、家族との接触が多い看護実習で指導していく必要がある。

キーワード：高齢者と家族、看護、受講前後、家族機能、パス図

Key words：Elderly Person and the Family, Nursing, Before and After the Lecture, Passing diagram

### はじめに

家族（family）は人間の最も基本的で身近な社会単位である。あなたが考える家族が家族とと思ってくださいと言うと、犬の「太郎」も家族と回答する人がいる。クレヨンしんちゃんの一家は核家族、ちび

まるこちゃんの一家（日本の伝統的なタイプ）は直系家族、サザエさんの一家（戦前には多かったタイプ）は複合家族である。性転換が戸籍上可能となるなど家族の考え方は複雑化・多様性を増している。家族の機能では性的機能、社会化機能、経済機能、

情緒安定機能、福祉・保健・医療機能が言われてきた。家族関係ではベツタリ、ピツタリ、サラリ、バラバラと表現されるなどその関係は、上下関係から親愛・敬愛としての関係、責務として孝行などが影響している。今までの家族の見方や考え方が揺らいでいる時代である。

看護の対象を捉えるときに、本人だけでなく家族を含み、それを取り巻く地域も視野に入れて考える必要がある。小児から高齢者、家族の発達段階、病院から在宅までの空間（環境）、さらに時間系列も視野に入れ、形態・機能・役割・関係など多面的に見ることが要求される。今まで多数の教科で教えていたものを、「家族看護」としてはじめて開講した。受講した学生は「高齢者と家族への看護」についてどのように受け止めたかを明らかにする必要がある。

### 研究目的・方法

研究目的は家族看護の受講者が「高齢者と家族への看護」をどのように捉えたかを明らかにすることである。

対象は老年看護概論、家族看護の受講者（表1）で、研究方法は自己記入式アンケート調査（1. 基本属性 2. 家族の認識 3. 「家族看護」授業の変化 4. 家族機能と低下している家族機能）を、講義前1）2006年4月21日と講義後2）2007年1月16日に実施。分析にはSPSS・AMOSを使用。倫理的配慮として調査意図、利用の限定、評価に無関連、未協力で不利益はこうむらない、統計処理し個人特定は無を説明、了解を得たものに自由意志で自己記入を求めた。

### 結果

受講者は45人で評価に無関係、協力しないことでの不利益はないこと等を強調し、了解の得た者を実施した。協力が得られたのは受講前・後ともに43人（95.6%）であった。

#### 1. 背景

受講者は年齢が19.2歳（SD0.49）、男性9.3%で、女性が90.7%と多い。世代は二世代が55.8%、三世代が44.2%であり、祖父母との同居は44.2%であった。家族人数は平均5.02（SD1.12）人で、家族人数は4人（25.6%）、5人（30.2%）、6人（30.2%）であった。全員父も母もあり、兄弟では一人が48.8%、二人が37.2%であった（表1-1）。家族には恵まれた受講生であると考えられる。

祖父母との同居は44.2%であり、そのうち祖父30.2%、祖母は39.5%であった（表1-2）。過去の同居経験を踏まえると約半数が、祖父母の生活を共にしていた。

家族のタイプは、平等主義的自立型37.2%、平等主義的共同型32.6%で、家族の関係はピツタリ46.5%、サラリ41.9%の2つが大方を占めた（表1-3～4）。まだ学生であり、家族への依存と家族からの自立が半々と言える。大学入学以前、家族との食事は朝夕一緒32.6%、日に一回34.9%であった（表1-5）。約2/3と一緒に食事をしているが、残りの1/3は週に何回かのみで、現代社会の家族のあり方を示しているように、家族に中での個人化が進んでいると考えられる。

表1 高齢者と家族看護

講義目的；高齢者と家族の看護を考えることができる。		
老年看護概論	「家族の支えと絆 現代社会に求められる生き方」を読む。 感想のテーマ「高齢者と家族」	2年前期
家族看護	老人を取り巻く家族（KJ法） 単身・老夫婦・他世代同居の高齢者 1) オリエンテーション（KJ法について） 2) 高齢者を取り巻く家族（単身者・老夫婦・他世代同居）「問題点と看護」発表 3) 高齢者と家族への看護（アセスメント） 鈴木和子・渡辺裕子, 1999, 家族看護学理論と実践 第3版, 日本看護協会出版会.	2年後期 90分×2コマ

表1-1 家族構成 人数 世代 n=43

本人	%	家族人数	%	世代	%
父	100	2人	2.3	二世	55.8
母	100	3人	4.7	三世	44.2
祖父	30.2	4人	25.6		
祖母	39.5	5人	30.2		
兄弟姉妹0人	9.3	6人	30.2		
1人	48.8	7人	7.0		
2人	37.2	平均人数	5.02人		
3人	4.7	(SD)	1.12		

表1-2 祖父母と同居 n=43

	今も同居	過去に同居	別居	祖父母は死亡
%	44.2	9.3	46.5	0

表1-3 家庭のタイプ n=43

家庭のタイプ	%
1. 無秩序な家庭(指導者がいない)	7.0
2. 平等主義的共同型(お互い影響しあい、決定は一緒に行う)	32.6
3. 平等主義的自立型(お互いが影響し合うが、決定は各自がおこなう)	37.2
4. 柔軟な支配(特定の人物が決定を行いコントロールしているが、その程度はあまり強くない)	20.9
5. 著しい支配(特定の人物が決定を行いコントロールし、その程度は交渉も行えないほど著しいものである)	2.3

表1-4 家族の関係 n=43

	ベッタリ	ピツタリ	サラリ	バラバラ
%	4.7	46.5	41.9	7.0

表1-5 家族そろって食事(入学以前) n=43

	朝夕一緒	日に一回	週に数回	ほとんど一人で
%	32.6	34.9	27.9	4.7

## 2. 受講後の思い

家族看護の受講によって変わった20.9%、どちらかと言えば変わった62.8%であった(表2-1)。具体的な内容を見ると「家族をもっと大切にしようと思った」、「家族というものは本当に大切だという事を実感した」などであった。変化の内容は「プラス変化」が83.7%で、「マイナス変化」は0%であった。家族看護を受講することで改めて自分と家族関係を見直すチャンスであったと言える。

## 3. 家族の認識、受講前後の比較

家族の認識について前後で比較した。家族の定義は「家族とはお互いに家族と認識し、絆を共有する2人以上の集団である。非婚、同性愛を含む」が前44.2%、後58.1%と多くなっている(表3-1)。後では夫婦別姓容認が多くなっている(表3-2)。子どもを持つことは個人の選択の問題であり、色々の夫婦の在り方があって当然であるが多い(表3-3)。

表2-1 「家族への看護」受講後の変化 n=43

	変わった	どちらかと言えば変わった	どちらかと言えば変わらなかった	変わらなかった
%	20.9	62.8	7.0	0
内容	1.よい(83.7%)	2.悪く(0%)		

家族に他人が入れないと思うかに対して、前後で大きな変化はなかった（表3-4）。

家族とは時には、離れたいものであるに対して、後に若干思う傾向が強くなっている（表3-5）。

親の財産は家を継ぐものが60.5%と多かったが、後では子供が平等に継ぐべき64.4%と多くなって

いる（表3-6）。

年をとった親との同居の有無では、「子供は親

表3-1 あなたが考える家族（%） n=43

	前	後
1. 家族とは婚姻関係にある男女とその子共である。	9.3	
2. 家族とは婚姻関係と血縁関係で結ばれ、お互いに家族と認識し合い、2人以上の集団である。	39.5	30.2
3. 家族とはお互いに家族と認識しあい、絆を共有する2人以上の集団である。非婚、同性愛を含む。	44.2	58.1
4. 家族とはお互いに家族と認識しあい、同じ目的で集まった2人以上の集団である。共同生活。	7.0	11.6

表3-2 夫婦別姓であってもよい n=43

	前	後
1. 思う	25.6	25.6
2. どちらかと言えば思う	30.2	46.5
3. どちらかと言えば思わない	25.6	18.6
4. 思わない	18.6	9.3
平均	2.37	2.12

表3-3 結婚しても子供を持つことを選択しない夫婦について（%） n=43

	前	後
1. 個人の選択の問題であり、色々の夫婦の在り方があって当然である	76.7	76.7
2. 夫婦の結びつきを強める子育てを経験しないのは残念である	4.7	2.3
3. 生活の励みにもなる子育てを経験しないのは残念である	4.7	16.3
4. 人は子育てをして初めて人間的に成長する者であるから、残念である	4.7	2.3
5. 次の世代の国民を作るといふ社会の責任を果たしてない	4.7	
6. 現在の社会では子育てが難しいから、しかたがない	2.3	2.3
7. その他		

表3-4 家族に他人が入れないものか n=43

	前	後
1. 思う	11.6	11.6
2. どちらかと言えば思う	34.9	39.5
3. どちらかと言えば思わない	39.5	30.2
4. 思わない	14.0	18.6
平均	2.56	2.56

表3-5 時には家族と離れたいか n=43

	前	後
1. 思う	23.3	23.3
2. どちらかと言えば思う	48.8	53.5
3. どちらかと言えば思わない	18.6	16.3
4. 思わない	9.3	7.0
平均	2.14	2.07

表3-6 親の財産は誰が継ぐべきか（%） n=43

	前	後
1. 長男が継ぐべきである	11.6	4.7
2. その家(墓)を継ぐものが、親の財産を継ぐべきである。	60.5	7.0
3. 老いた両親を世話した者が継ぐべきである。	27.9	16.3
4. 子供が平等に継ぐべきである。		67.4

表3-7 年をとった親と子供との同居（%） n=43

	前	後
1. 息子(夫婦) と同居するのがよい。	14.0	23.3
2. 娘(夫婦) と同居するのがよい。	39.5	37.2
3. 別に住み、時々(1月程度)子供のところに行く。	27.9	27.9
4. 子供は親と別に暮らすのがよい。	18.6	7.0

表3-8 老親の扶養は、あたり前か（%） n=43

	前	後
1. 思う	32.6	23.3
2. どちらかと言えば思う	53.5	58.1
3. どちらかと言えば思わない	11.6	16.3
4. 思わない	2.3	2.3
平均	1.84	1.98

表3-9 両親が年老いたとき面倒みるか (%) n=43

	前	後
1. どんなことをしても養いたいと思っている	23.3	27.9
2. 自分の生活力に応じて親を養う	69.8	60.5
3. なるべく親自身の力に任せて生活して貰う	7.0	11.6
4. 全て親自身や社会保障に任せて、面倒を見ない	0	0

表3-10 高齢者の介護 (%) n=43

	前	後
1. 子供(男女に関わらず)が力を合わせて介護するのがよい。介護はその子供の役目である	67.4	79.1
2. 女の子共か、又は子供の妻が介護するのがよい。介護は女性が適している	0	2.3
3. 介護を受ける高齢者の配偶者がよい	4.7	2.3
4. ヘルパーが有料で家庭に介護にきてくれるのがよい	14.0	7.0
5. 病院で介護を受けるのがよい。	0	0
6. 老人ホームやケアハウスに入って介護を受けるのがよい。	14.0	4.7

と別に暮らすのがよい」が前18.6%から後7.0%に低下している。「息子(夫婦)と同居するのがよい。」は前14.0%から後23.3%と増加している(表3-7)。老親の扶養は8割が当たり前と考えている(表3-8)。

年老いたとき両親の面倒については、後は「自分の生活力に応じて親を養う」が下がり、「どんなことをしても養いたい」と「親自身の力に任せて生活して貰う」が上がっている(表3-9)。

高齢者の介護については「子供(男女に関わらず)が力を合わせて介護するのがよい。介護はその子供の役目である」前67.4%が、後に79.1%と高くなっている(表3-10)。

#### 4. 家族機能と低下している家族機能について、受講前後の比較

家族機能についてフリードマン(鈴木, 2006; 41)野嶋(1993; 74)は情緒、社会化と地位付与、ヘルスケア、生殖、経済的機能の5つの機能を示している。時代の変化と共に家族機能は外部化し、パーソナリティ機能や個別機能が重視されてきた(森

岡, 1997; 170-180)と言われる。これらを参考に、家族の機能を7項目上げ、家族機能に対する認識と低下している家族機能について四肢択一で尋ねた。

家族機能について前後の平均値を見ると、前1.54から後1.49で全体的にはほとんど変わらない。前では「情緒面の安定1.23」、後では「情緒面の安定1.22」や「経済生活の基盤1.22」の家族機能が低い。前後で見ると「文化の継承」や「対外的な交流」では若干機能がある方向に変わっている。

低下した家族機能では前では「介護機能2.19」、後では「情緒面の安定1.98」と上がっている。全体の平均値をみると前2.3が後2.17で機能低下が大きくなっている。後に家族機能低下の方向に移行したのは「情緒面の安定0.19↑」、「対外的な交流0.19↑」で、反対に機能低下していない方向へ変わったのは「経済生活の基盤0.14↓」であった。

t検定で家族機能と低下した家族機能低下との関係を見ると、前後とも「家事」、「情緒面の安定」、「経済生活の基盤」と「養育機能」の4項目で、後で「対外的な交流」に有意差がみられた。家族機能に注目すると前後で「介護機能」に有意差が見られた。低

表4-1 家族機能 四肢択一

(1. 思う 2. どちらかと言えば思う 3. どちらかと言えば思わない 4. 思わない)

1. 料理・掃除など生きていく(食欲・安全)生活基盤がある。	① 家事
2. 心の安らぎを求めるなどの情緒面の安定がある。	② 情緒面の安定
3. 家計など経済生活の基盤がある。	③ 経済生活の基盤
4. 子供を産み、育てるなど養育機能がある。	④ 養育機能
5. 病人や老いた親の世話をするなど介護機能がある。	⑤ 介護機能
6. 文化(言葉・習慣)の継承をする役割がある。	⑥ 文化の継承
7. 対外的な交流(人間関係、仕事など)する基盤となる。	⑦ 対外的な交流

表4-2 家庭機能と低下した家族機能；平均値・t検定による受講前後比較 \*<0.05, \*\*<0.01, \*\*\*<0.001

1.思う～4.思わない	前			後			機能の前後	低下した機能の前後
	機能	低下		機能	低下			
① 家事	1.28	2.57	***	1.24	2.66	***		
② 情緒面の安定	1.23	2.17	***	1.22	1.98	***		
③ 経済生活の基盤	1.28	2.71	***	1.22	2.85	***		
④ 養育機能	1.37	2.29	***	1.32	2.17	***		
⑤ 介護機能	1.77	2.12		1.78	2.00		*	
⑥ 文化の継承	1.91	2.19		1.83	2.29			
⑦ 対外的な交流	2.00	2.36		1.83	2.17	*		
平均値	1.54	2.34		1.49	2.30			

表4-3 家族機能で一番は重要・低下した家族機能の一番低下 (%) n=43

	家族機能		低下した家族機能	
	前	後	前	後
① 家事	7.0	4.7		
② 情緒面の安定	69.8	79.1	25.6	30.2
③ 経済生活の基盤	4.7	2.3	4.7	2.3
④ 養育機能	14.0	4.7	16.3	20.9
⑤ 介護機能			27.9	18.6
⑥ 文化の継承			20.9	20.9
⑦ 対外的な交流		2.3	4.7	2.3

下した家族機能では講義前後では有意差は見られなかった。

家族機能の中で一番重要かでは情緒面が前69.8%、後79.1%でともに高く、受講生が家族に期待しているものは情緒機能である。低下した家族機能の一番は意見が分かれ、情緒機能では前25.6%（後30.2%）、介護機能では27.9%（18.6%）、養育機能では16.3%（20.9%）、文化の継承機能では20.9%（20.9%）であった。低下した家族機能の捉え方はさまざまである。

### 5. 家族機能と低下している家族機能、講義前後の構造による比較

講義後の家族機能について、影響力を視野にいれパス図（標準化推定値）を使い検討した。パス図（図5-1）はGFI0.94, AGFI0.88, CFI1.00, RMSEA0.00, AIC39.11で構造としてはまずまずであった。すべての項目でC.R.>1.96であり、その因果関係には意味があると言える。構造は2つのサークルに分かれた。「日常生活のサイクル」と「養護・文化的なサイクル」である。

後について全体の影響力（因果関係）から検討した結果、家族機能は生活基盤を代表する「日常生活のサイクル」と「養護・文化的なサイクル」に分け

られた。

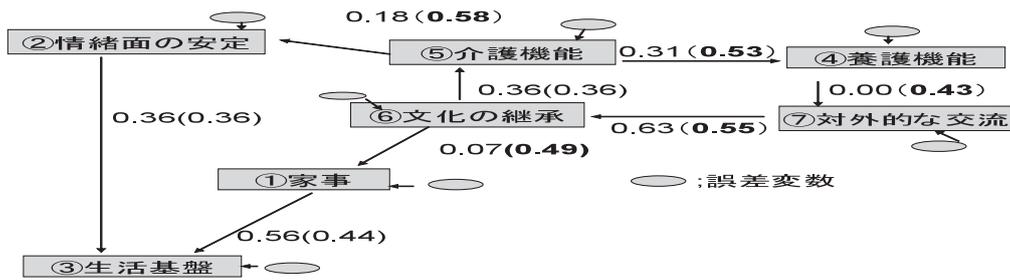
さら受講前後を比較するために、同じモデルで講義前も求め、低下している家族機能についても同じモデルで前後を比較した（図5-2）。

家族機能（7項目）の前後を比較すると、全体に後が項目間の関係が高くなっている。その差を見ると、養護機能と対外的な交流機能では前が0.00、後が0.43に、文化の継承機能と家事機能前が0.07、後が0.49に、介護機能と情緒面の安定では前が0.18、後が0.58に、と大きな差があった。

低下した家族機能（同じ7項目）の前後を比較すると、後が高くなっているのは家事と生活基盤機能では前が0.40、後が0.79に、対外的な交流機能と文化の継承機能では前が0.21、後が0.47に、介護機能と養護機能では前が0.61、後が0.77であった。反対に低下したのが情緒面の安定と生活基盤で前が0.28、後が0.10であった。

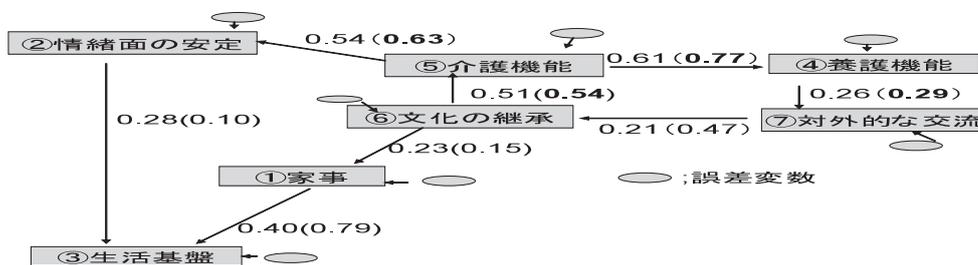
### 考 察

ライト Wright (2002; 48) らは家族とは強固な情緒的きずなで、帰属感、互いの生活にかかわりたいという欲求に結び付けられた個人の集団であると述べている。核家族化、単身赴任、離婚・再婚などの増加に伴い、家族のあり方は多様化し、家族概念



前 GF10.83,AGF10.64,CF10.75,RMSEA0.19,AIC64.47 後 GF10.94,AGF10.88,CF11.00,RMSEA0.00,AIC39.11

図5-1 家族機能のパス図 (標準化推定値)



前 GF10.78,AGF10.69,CF10.75,RMSEA0.24,AIC74.50 後 GF10.84,AGF10.67,CF10.85,RMSEA0.19,AIC39.11

図5-2 低下した家族機能のパス図 (標準化推定値)

があいまいの時代である。現在は「家」継承のための生殖よりも、夫婦の愛情と信頼が強調され、さらに個人の尊厳が重視される傾向が強い。「家」や血によるつながりではなく、共同体、支えあう存在としての家族が強調されることが多くなった。家族形態の変化、小家族化・核家族化、高齢者の単独世帯の増加、家族周期の変化、家事・保育・教育・介護機能などの外部化、家族意識の変化、家族の個人化、介護意識の弱体化が強調され、家族を取り巻く状況が激しく変化している。特に、「パーソナリティの工場」の危機であると言われる。

高齢者と家族看護の講義の前後に調査した。受講生の背景を見ると、全員に両親がおり家族環境には恵まれた集団である。高齢者との同居経験は約半数がいる。65歳以上の高齢者で三世同居が20.5% (国民衛生の動向, 2007:39) から考えると、核家族化が進んでいるとはいえ、受講生は高齢者との同居 (過去の同居経験を含む) が約半数で多いと考え

られる。時には家族から離れたい思いが見られ、また、その関係はベッタリ・ピッタリからサラリへの傾向がある。受講生は、親から離れて暮らす不安定さや一人前としての背伸びしたい思いが交差していると考えられる。

老年看護概論では、看護職48名の書いた家族への思いや家族看護「家族の支えと絆-現代社会に求められる生き方-」を読み、「高齢者と家族看護」をテーマにレポートを求めた。家族看護学では、高齢者 (単身者・老夫婦・他世代同居) を取り巻く家族について、「高齢者と家族への看護-問題点と看護-」をKJ法により検討し、多彩な・多面的な意見が出された。高齢者と家族への看護を考える関連の講義は、受講生の約8割に変化をもたらした。変化はプラスイメージがほとんどであった。イメージがよいことは高齢者看護する上で大きな影響を及ぼす。受講は学生の家族を考える大きなきっかけとなったと書いている。自分の家族との新たな見方、

関係に大きな影響を与えると考えられる。KJ法の発表では多面的な高齢者と家族の看護が見出され効果的な内容であったが、危機等に対する家族の変化、成長過程を捉えることには視点が不足していた。「家族には他人が入れないものだ」では、前後にほとんど変化がなく、家族アセスメントでは、家族を本当にここまでアセスメントしないといけないのかと疑問の声も聞かれた。学生は、家族への介入というよりは、見守り・第三者的な立場でのものの見方が強いと考えられる。家族が出来事をどのように意味づけ・受け止めるか（森岡，2007；81）は重要で、理解するだけでは家族は変化しない、選択肢を広げるような信念や考え方が変化をおこし、システム全体を変化させる（森山，1995；33）と述べており、前向きな姿勢が重要である。家族の力を発揮（自己効力）（高垣，2007；58-64）するための家族介入についてももう少し、意味づける必要があった。3年次の施設や病棟の老年実習では実習時間が短く家族にまで充分目がいけない、また家族と関わるのが少ないのが現状である。4年次の在宅実習・地域実習に期待したい。受講後、夫婦別姓に対して容認する傾向に移行している。子供を持つことに対して「個人の選択の問題であり、色々の夫婦の在り方があって当然である」が前後とも約3/4あり、家族単位と言うよりは、個々の家族員の思いを大切にしたいという期待が大きい。

受講後、親の面倒を見る受講生は多くなり、兄弟姉妹が平等に親を見る方向へ移行している。しかし、同居に関しては受講後息子夫婦との同居が多くなっている。親の扶養することには約7割から約8割に移行し、積極的に関わりたい・親の力に任せる傾向に移行していた。家制度は否定しつつも、親や祖父母の立場から考えるなど建前と本音が行き来していると考えられる。

家族機能について、細分化するとまだまだあると考えられるが代表的な7項目について調査をし、検討した。家族に期待する機能では受講前後ともに情緒面が大きかった。学生であり、家族と離れている下宿してみて、改めて家族を振り返った時に、情緒面が大きかったとも言える。介護や子育て中の人で

あれば、違った回答になっていると考えられる。前後で有意差のあったのは介護機能のみであった。受講することで、家族だけで介護するのではなく、上手に外部化を進め、情緒的サポートを意識したと考えられる。

受講後の後について全体の影響力（因果関係）から検討した結果、家族機能は生活基盤を代表する「日常生活のサイクル」と「養護・文化的なサイクル」に分けられた。家族機能をとらえるには、日常生活を維持するのに必要な視点と養護すること、すなわち文化継承の視点が向いていると言える。

項目間の影響力を受講前後で比較すると、養護機能と対外的な交流機能、文化の継承機能と家事機能、介護機能と情緒面の安定に大きな差があった。受講することで、子育てをすることは外部との交流を呼び起こし、社会化機能、文化継承することは料理や掃除などの家事機能の影響することを学習したと考えられる。家族機能に関する関連性が高くなっている。

低下した家族機能（同じ7項目）については、意見が分かれた。そこには、家族機能がひとつの問題だけでなく、さまざまな面で問題視されていることを物語っている。受講者の個々の思いが反映されている。後の影響力が高くなっているのは、家事と生活基盤機能、対外的な交流機能と文化の継承機能、介護機能と養護機能であった。学習によって、対外的な交流の低下は文化の継承の機能低下に大きな影響を与え、家事機能の低下は経済的な生活基盤の低下に、介護機能の低下は養護機能低下に影響がしているのが明確になったと考えられる。反対に後に低下したのが情緒面の安定と生活基盤であった。学生は学習によって情緒面の機能低下を感じているが、情緒面の機能の低下と生活基盤の低下とはつながりにくいようである。

家族機能、低下した家族機能は個々の項目間では有意差は少ないが、パス図を使い全体の関係（影響力）からみると項目間に影響力の違いが明確になった。受講することで家族機能の項目間の影響力に変化を及ぼしていた。

## 結 論

2006年度から2年次に家族看護を開講した。学習効果を探るために、高齢者と家族に対する認識変化を探るために受講前後にアンケート調査をおこなった。受講生43人(95.6%)は全員に両親がおり、高齢者との同居経験のあるものが約半数であった。受講生は「時には家族から離れたい思い」が見られた。

1. 家族に期待する機能では受講前後ともに情緒面が大きい。
2. 受講後は約8割が変化、プラスイメージに移行している。
3. 受講後、家族と言うよりは個々の家族員を大切にしたいという思いが強い。
4. 受講後、親の面倒を見るが多くなり、兄弟姉妹が平等に親を見る方向へ移行。しかし、息子夫婦との同居が多く、建前と本音が行き来している。
5. 家族機能7項目についてみると受講前後では介護機能のみで有意差があった。介護の外部化を意識したことが考えられる。
6. 受講後の家族機能項目間の影響力(因果関係)を見ると、「日常生活のサイクル」と「養護・文化的なサイクル」に分けられた。
7. 受講前後で家族機能の影響力を比較すると、養護機能と対外的な交流機能、文化の継承機能と家事機能、介護機能と情緒面の安定に大きな差があった。受講前後で低下した家族機能の影響力を比較すると、家事と生活基盤機能、対外的な交流機能と文化の継承機能、介護機能と養護機能、情緒面の安定と生活基盤に大きな変化があった。受講することで、家族機能項目間での影響力の大きく影響を与えていた。

比較のため、受講後である家族機能のパス図を採用したが、受講前、低下した家族機能の受講前後にはそれぞれにより適したパス図が予測され、今後検討していきたい。次年度は学生の集団は異なるが、これらの結果を参考に、新たな教授方法について工夫をしていきたい。

## Abstract

In the elderly person nursing, the elderly person and the

family (Community) are objects.

We started "Family nursing (student of two years)" in 2006. To verify the effect of the lecture, the questionnaire was made a student before and after the lecture. 43 students (95.6%) answered.

1. The student's consideration has changed by about 80 percent (plus image). They wanted to value the individual in the family or more.
  2. They are expecting both of the emotion function in the family function before and after.
  3. The influence power (passing diagram) between items of the family function was examined. It was divided into "Cycle of daily life" and "Protection and cultural cycle".
  4. The family function had differences in Protection and Foreign, Cultural Succession and Housework.
  5. Decreasing family function had differences in Foreign and Culture, Housework and Life.
- The lecture of "Nursing to the elderly person and the family" was effective. However, the student doesn't understand the changed family. It is necessary to guide it by the nursing practice in the future.

## 引用・参考文献

- 1) 谷田恵美子・橋本和子・横山ハツミ・道廣睦子編著, 2005, 看護専門職の人生を育むものシリーズ家族の支えと絆－現代社会に求められる生きる力－, 西日本法規出版, 岡山.
- 2) 鈴木和子・渡辺裕子, 2006, 家族看護学－理論と実践－, 日本看護協会出版会, 東京.
- 3) 野嶋佐由美, 1993, 家族看護学, へるす出版, 東京.
- 4) 森岡清美・望月嵩, 1997, 『新しい家族社会学(四訂版)』, 培風館, 東京.
- 5) Wright, L.M. & Watson, W.L. & Bell, J.M. 杉下知子監訳, 2002, ビリーフ－家族看護実践の新たなパラダイム, 日本看護協会出版会, 東京.
- 6) 厚生統計協会, 2007, 国民衛生の動向2007年, 54:9.
- 7) 高垣静子, 2007, 家族介護者の自己効力感を高

める看護, 家族看護; 58-64.

- 8) 森山美知子, 1995, 家族看護モデル－アセスメントと援助の手引き, 医学書院, 東京.